

高校トラックは生徒の進路希望に影響を与えるのか

——中学生と母親パネル調査（JLPS-J）データを用いた分析——

東京大学

藤原翔

1 目的

本研究の目的は、進路選択の社会経済的格差のメカニズムを明らかにするために行われた「学校生活と将来に関する親子継続調査」（JLPS-J）の第1波調査と第2波調査の概要と基礎的な分析結果を示すことである。第1波調査（2015年10月から2016年1月）では、ある調査会社のモニタとして登録されている中学3年生とその母親に対して郵送調査を行った。4,117世帯に調査票を郵送し、1,859世帯（45.2%）から調査票が回収され、親子ペアでの有効回収は1,854世帯（45.0%）となった。その2年後に第2波調査（2017年12月から2018年1月）として、1,854世帯に対して郵送調査を行った。1,591世帯（85.8%）から調査票が回収され、親子ペアでの有効回収は1,496世帯（80.7%）となった。データの特徴として、高校進学前と進学後の変化を把握することが可能なことや、変化の情報を活用した因果分析が可能ながあげられる。本研究では、このデータを用いて、従来の高校生研究が明らかにしてきたような高校トラックと生徒の進路希望の関連ではなく、高校トラックが生徒の進路希望に与える因果効果についての分析を行う。

2 方法

2時点の情報を利用した固定効果モデルによって、観察されない異質性の影響を取り除いたうえで、高校トラックが生徒の進路希望に与える影響を明らかにする。従属変数となる進路希望は、生徒と母親の教育アスピレーションと教育期待（ともに教育年数）、そして生徒と母親の職業期待（社会経済的地位と社会的地位変数）である。独立変数は、高校タイプである。高校タイプは偏差値と学科によって、普通科A（偏差値60以上）、普通科B（偏差値50以上60未満）、普通科C（偏差値50未満）、専門学科（偏差値の平均は普通科Cと同程度）の4つに分類した。中学3年時の高校タイプはその当時第1希望であった高校の情報に基づく。また、高校2年時の高校タイプは、実際に通っている高校の情報に基づく。共変量（時間とともに変化する変数）は、世帯年収、貯蓄額、母と生徒それぞれの生活の豊かさの自己評価、父親職業（EGP社会階級分類+父不在）、調査年である。

3 結果

分析の結果、普通科C（基準カテゴリ）と比較した場合、専門学科であると生徒の教育アスピレーションと教育期待、そして母親の教育期待が低くなることが示された。一方で、普通科内では統計的に有意な差は見られない。つまり、希望していた普通科と実際に通うことになった普通科の間で偏差値が異なっていようが、それは高校生や母親の進路希望に影響を与えないといえる。また、職業期待に対しては高校タイプは影響を与えていなかった。なお、偏差値と専門学科ダミーを用いたモデルによる分析からも、偏差値の効果はなく、専門学科ダミーの負の効果が確認された。

4 結論

普通科と専門学科の違いが教育アスピレーションおよび教育期待に影響を与えていることが明らかになった。一方で、普通科内での差異は、少なくとも現在の生徒たちにとっては、進路形成に影響を与えていない。進路希望の形成という点で、学科内よりも学科間の差異が重要だといえる。

付記 本研究はJSPS科研費15H05397の助成を受けたものです。